

学園

平成12年 6月20日発行

財団法人

中国四国酪農大学校

電話 (0867) 66-3651

FAX (0867) 66-3652

E-mail jerko@tw.bekkoame.ne.jp

<http://cali.lin.go.jp/japan/k33/rakudai/index.htm>

だより



巻頭のこぼ

校長 古好秀男

四季の訪れが、人間の心を和ませてくれる自然界の不思議と偉大な力には驚きと感動を与えてくれます。

一、〇〇〇m級の蒜山三座にも今年の冬期にはラニ―ニヤの影響か、何年ぶりの大雪でありました。万物にとって雪の恩恵は大きく特に雪は自然のダムの役割を果たすと同時に野山に保水能力を最大限に生かしてくれています。春先になると野山から徐々に溶けだし川の水量を豊にしてくれ上流から下流、海に至るまでに人の生活に計り知れない恩恵を与えています。

ここ十年来、国、県、市

町村を挙げて後継者の問題が大きく取り上げられています。酪農後継者不足も決して例外ではありません。

しかしながら財団法人中国四国酪農大学校におきましては、お陰様で卒業生も三四年間で八七七人となりました。その中でも、酪農を営んでいる人が五〇〇人（五七％）、畜産関係団体に従事している人が二一〇人（二四％）で約八一％の人が畜産関係で活躍し酪農発展に大きく貢献していることは、本当に喜ばしい限りであります。

最近の傾向として全国に

農業大学校に女性入学者が増加していることが話題になっておりますが、どんな職種であっても後継者というのとは基本的には独身者である限り後継者の予備軍であつても真の後継者ではありません。真の後継者というは、男性と女性共に後継者になろうとする人が結婚して初めて真の後継者になると思ひます。そのためには、自分が選んで目指す職業に対応するために技術の錬磨をすることは、男性、女性を区別することなく後継者を養成することが最大の得策であると思ひます。

今日、情報化社会の発展

の中であらゆるメディアを生かして成長してきた若者の感覚は、二十一世紀を見据えた新しい息吹をもたらしてくれるものと期待しています。何事を成し遂げるにも多かれ少なかれ必ず壁があるでしょう。自分で努力すれば乗り越えられる壁もあれば、周囲の環境や物理的要因によって乗り越えることができない壁もあると思ひます。

誰にでも可能性は無限にあります。後継者養成機関の関係者が一丸となつて、一生懸命に取り組んでいる若者の芽を何としても伸ばしてやろうではありませんか。

来る十一月二日から五日まで岡山県で開催される第十一回全日本ホルスタイン共進会及び第三回全日本ジャージー共進会に一頭でも多く酪大を含め同窓生の皆

さんの中から優秀な牛を出品しようではありませんか。全国共進会会場に（財）中国四国酪農大学校のコーナーを設け同窓生を始め全国の酪農経営をめざす方々や関係者の皆さんが来られることをお待ちしています。全国共進会会場で大いに語りましょう。



教務課だより

第三四期生

卒業証書授与式

平成十二年三月二二日、
第三四期生二四名（別表）
が、卒業。
理事長表彰

優等賞・真鍋珠美

校長表彰

優等賞

石寄陽子・中川 愛

堀田厚子・宮崎幸喜

卒業論文賞

大谷昌史・細川浩良

小林孝弘・佐藤 仁

第三六期生入学式

平成十二年四月六日、第
三六期生二八名（別表）が
入学。

歴史的入学式？

昨年の「学園だより」では、十二名の女子生徒が入学し華やかな学校生活が始まったとお知らせしました。

今年は、一四名の女子学生の入学がありました。人数では、三〇期生と同じでしたが全体で二八名であったため、遂に男女比五〇対五〇となりました。岡山のテレビ局のニュースでは、「歴史的入学式」とのタイトルで放映されました。

実際に、講義・実習が始まるとその賑やかなことに驚かされます。まさに姦（かしま）しいとはこのことです。しかし、実習では、多くのことが機械化されていることもあり、ほとんど支障はないようです。



国際交流

十一年度にもオーストラリアのオンカパリンガタフェ学園との交流事業を実施しました。

九月十月の二カ月間、三名の学生を派遣し、現地でのホームステイでオーストラリアの大きさをを充分体験してきました。

また、平成八年度から三年振りにオーストラリアからの交換研修生を五〜六月に二名受け入れました。二名は、共に本校同窓生の筒

大彦二さんと樋口幸夫さんのお宅にホームステイをお願いし日本型の酪農のみならずお茶、お祭り等日本文化も体験して帰りました。





第11回全日本ホルスタイン共進会
第3回全日本ジャージー共進会
ファームフェスタ
2000
in おかやま

夢ミルクン
マスコットキャラクター

職員紹介

校長	古好 秀男*
次長	高山 介作
(総務課) 課長	宮地 正信*
主事	津田 清子
〃	有富 英美*
(教務課) 課長	次長兼務
課長補佐	長尾伸一郎
〃	岸戸 武士
運動技術員	池田 富幸
調理技術員	講元 勝代
〃	西田 良子
〃	石原 峰子*
(経営課) 課長	田林 宏一*
第一牧場長	経営課長兼務
技師	守屋 吉英
助手	樋口 照夫
第二牧場長	平野 充生
技師	横内淳一郎
〃	田中 健嗣*
〃	磯田 博
助手	池田 良弘

*印は、新職員

卒業生から 在校生から

酪農大 同窓会会長から

同窓会会長 筒井 一

同窓生の皆様、御健勝で
益々ご活躍の事と拝察申し
上げます。

蒜山の今年の冬は、近年
にめずらしく、雪の日が続
き、積雪も多く、除雪作業
に多忙な冬となりました。
春も寒い日が続く雪解けが
遅く草木の芽立ちは昨年に
比べると半月遅れの感じが
します。

さて、同窓会も発足後六
年目を迎えております。皆
様には、趣旨を御理解の上
御協力を戴いておりますこ
と感謝申し上げます。
特筆する様な活動を行っ
ている訳ではありません
が、僅かながらでも母校へ
の一助になればと考える次
第でありますので、入会が

しんで語り合っていただき
たいと思います。お待ちし
ております。

目指そう岡山全共 蒜山地区牛乳改良同志会

会長 長 恒 泰 治

酪農家にとって五年に一度
の一大イベントである全日
本ホルスタイン・ジャージ
ー共進会岡山大会を半年後
の控え、蒜山地区乳牛改良
同志会としても一頭でも多
くの牛を地元開催の全共へ
出品したいと飼育管理に懸
念に頑張っているところで
す。酪大も中四国の酪農専
門学校としては是非とも出品
していただきたいと願って
います。

さて、我々酪農家は食品
生産のために経済動物とし
て乳牛を日々飼養し、より
一層の経営の合理化、効率
化を目指し経営を展開して
おります。しかし、どうし
ても理屈では叶わぬ分野と
して乳牛改良があります。
通常動物(乳牛)は、子孫
繁栄のため、その子牛の必
要量のみ分泌乳量だったも
のを人間が経済動物として
利用し百年來、先達からの
改良の成果により今ではピ
ーク時では、必要量の十数
倍の泌乳量を記録するよう
になりました。高乳量血統
の積み重ねによる交配の歴
史でありましょう。サラブ
レットが人間の作り出した
走る芸術品であれば、さし
ずめ乳牛は、人間が作出し
た食品生産の芸術品であり
ましょう。

れを支える肋の開張、腹の
しまり・連産しても搾乳性
のよい乳房の付着、じん帯
の強さ、底面の高さ、
等々・・・。

本当の意味での素晴らし
い牛、最高傑作をつくるこ
うなのは牛飼いとて、改
良同志会としての追い求め
る夢です。中国四国酪農大
学校のこの地域の仲間と共
に一緒にこの夢を求めまし
よう。



卒業を前に、第三四期生に、
「酪大の将来あるべき姿」を提
言してもらいました。そのい
くつかを紹介します。

●畜産共進会で県でトップを
とる。そのためには、北海
道から優良牛を導入し改良
の基礎とする。

●搾乳ロボット等最新機械を
導入し先端技術に触れるこ
とができるようにする。

●楽しく、気持ちの良い汗を
流すことができるクラブ活
動をする。

●学生数が増え、機械化もさ
れ、その上講義時間が増え
ているので、実習の時間を

酪大への提言

酪農ヘルパーになるにあたり

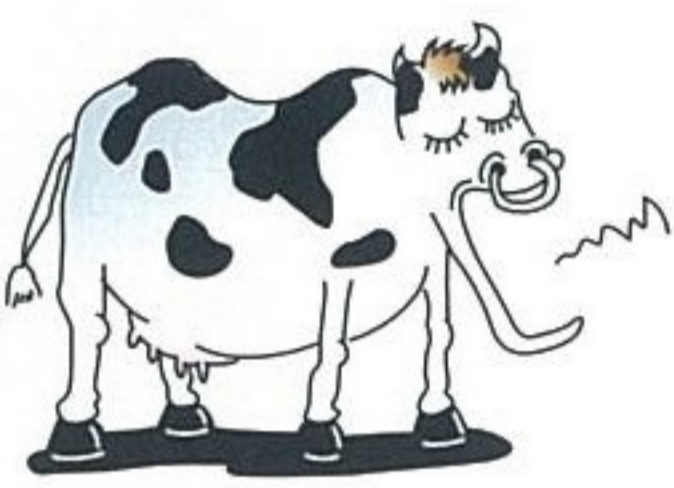
第三四期 池 内 成 光

私は、四月から岡山県のホクラク農協で酪農ヘルパーとしてお世話になりました。酪農ヘルパー専門技術員養成研修では、学校や研修先に御迷惑をおかけしましたので、その反省と決意を述べます。

私は、高校に入学し友達に連れられて松崎牧場に行き遊んでいるうちに、だんだん酪農の厳しさや、楽しさを学び酪農大学に進みたいと思うようになりました。酪大で酪農ヘルパーの道を知り、将来酪農経営を夢見ていたため良い勉強の場になると思うようになりました。

教えていただきました。それは、遅刻、欠勤です。そのためには常に病気をしないよう気をつけ、健康管理をきちんとし、早寝早起きを心がけることが必要です。ヘルパー研修中は、川上村の長恒泰治さんには、良い勉強をさせていただくと共に、大変御迷惑をおかけし申し訳なく思います。このことを肝に銘じ実際のヘルパー先で失敗をしないよう頑張っていこうと思っています。

この二年間で学んだことを最大限に生かし、一生懸命精進し、農家に信頼される酪農ヘルパーになるつもりです。



海外研修を終えて

第三四期 真 鍋 珠 美

私は、平成十一年九月から約二カ月オーストラリアへ海外研修に参加させていただきました。

オーストラリアに行きたいと思った理由は、以前から外国に興味を持っていて日本以外の国の文化に触れてみたいと思っていただけです。また、日本とは全く異なるオーストラリアの酪農を実際に見てみたいと思ったからです。

最初は、一緒に行った皆、海外は初めてで、とても不安だったけれど、オーストラリアの人達が快く迎えて下さったので緊張がほぐれていききました。しかし、言葉の壁は大きくお互いの気持ちを理解しあうのに時間がかかりもどかしさを感じることがありました。

頭の大規模経営が主流でした。どの酪農家も広い土地を持ち、牛舎は無く牛は常に放牧されていました。一頭当たりの乳量は少ないが、一日の出荷乳量は日本とは比べられない程大量でした。

ホームステイ先では生活習慣の違いに戸惑いました。パンや肉が中心の食事や風呂の入り方、休日の過ごし方等日本とは全く異なっていて慣れるまでに時間がかかりました。気候は乾燥しており日本のようにじめじめしていません。とても過ごしやすかったです。

滞在は、短かったけれど、多くの人達と出会い、話をすることができたことで酪農に対する視野が広がられたと思います。この経験を今後、役立てたいと思っています。もし機会があればまたオーストラリアに行きたいと思っています。



オーストラリア TAFE学園にて

- 増やし、牛のブラッシング、しつぱ洗いなどを毎日やる。
- 学生数が多すぎて、実習で学べることが少ないので、募集人員を減らす。
- 現在の酪農経営に対応できるような機械が使いこなせるよう実習の時間を増やすべきだ。
- 寮は汚いし、牛舎も蜘蛛の巣やホコリで汚れているので実習時間を増やし環境整備を徹底する。
- 土曜日曜日は、自炊する人が多いので女子寮に台所をもう一つ造る。
- 学校や職員には耳の痛い内容もありますが、学生の求める姿に近づくよう努力しようと考えています。

第1牧場だより

例年になく大雪となり厳しかった冬も終わり、緑が美しい春本番の今日この頃ですが、卒業生の皆様にはお元気で御活躍のこととお喜び申し上げます。

平成十二年度の第一牧場の陣営は、新たに田林場長を迎え、守屋技師、樋口助手で頑張っています。

乳用牛においては、家畜改良及び先端技術の普及という見地から受精卵移植技



術を積極的に活用し、十一年度は移植十九頭、採卵三頭を実施しました。受精卵移植による産子も三頭生まれました。また、牛群の質も職員・学生一同の努力により年々向上しており、一日の平均出荷乳量が一トンを越えるのも近いと思われます。

さらに、本年十一月二日（五日）に岡山県児島郡灘崎町で開催される、第十一回全日本ホルスタイン共進会に向けて、優良牛の導入等により現在、出品候補牛が二頭おり、学生が毛刈り、運動、調教と全共出品を目指して頑張っています。

肥育牛においては、十一年度には二一頭を出荷しましたが、現在の出荷月齢は三〇ヶ月であり、これを少しでも短縮するよう努力しています。

牧草の状況は、十一年度は天候の影響でトウモロコシの収量がかなり少なく、



サイレージはゴールドデンウイーク前には底を突いてしまいました。

最後になりましたが、今年も本校でたくましく育った若者が二四名卒業し、一方で、夢に胸を膨らませた新生者が二八名入学してきました。卒業生の皆様には酪農大学の近くにお寄りの際には、本校に足を運んでくだされば幸甚に思います。また、岡山県で開催される酪農の祭典である全共へも足を運んでくださるようお願い申し上げます。

新・旧 哺乳形態の長所短所

	旧 哺 乳 形 態	新 哺 乳 形 態
長 所	<ul style="list-style-type: none"> ガブ飲みさせるため早くミルクがやれる 	<ul style="list-style-type: none"> コンピューターにより個体管理 分割給与により胃に負担が少ない ミルクの温度が一定 手間がかからない 群飼により固形物の摂取が早まる（大きい牛の真似をして食べる） 哺乳データで健康状態を把握 へそと口の舐め合いがない
短 所	<ul style="list-style-type: none"> 下痢の多発 重症例が多く、死亡率が高い 治療回数が多い ヒネ牛が出る スターター摂取量の把握が困難 スターターに涎がついて変敗 	<ul style="list-style-type: none"> 伝染病が出たら群内にたちまち広がる 飛沫感染しやすい 別途、隔離施設を要する

飼育頭数

平成12年4月1日

区分	第一牧場	第二牧場
経産牛	46	95
育成子牛	34	61
乳用牛計	80	156
肥育牛	39	—
繁殖和牛	2	—
肉用牛計	41	—
合計	121	156

第2牧場はジャージー牛（単位：頭）

第2牧場だより

(7) 学 園 だ よ り

今年の春は、例年より一週間遅れで四月二五日に初放牧を行いました。冬の積雪が多かったことや、春先の低温の影響で牧草の生育も遅れています。それでも五カ月ぶりの放牧ということで、当日は扉が開くと待ちかねていたジャージー達が、競走馬のような勢いで飛び出していきました。コンクリートやマットより蹄が適度にグリップできる土の上で「気持ちええでえ」、漬け物（サイレージ）や干物（乾草）にも飽きていたので、柔らかい新芽の青草が「でーれーうめー」とからだ中で表現していたのが印象的でした。

さて、施設整備により新築されたフリーストール牛舎に移転してはや二年、育成牛舎も一年以上が経過し、人も牛もやっと新しい環境に慣れた感があります。それでも、ジャージーの放牧適性を生かした草地酪農の実践とフリーストールによるTMRやフィードステーションを駆使した省力的な飼料給与という相反する管理技術を組み合わせるために試行錯誤しながらオリジナルパターンを探っています。放牧草の草勢はどんどん変化していくので、牛群の平均乳量や食い込み、肋張り・BCS等と相談しながら放牧時間や給与メニューを加減しているところでは、現在は三〜六時間の放牧をその日の都合で行っています。例えば、雨の日はずっと食べるので長めとか、暑くなると早朝

から昼前までにすると言った具合です。

粗飼料については、完全自給するという第2牧場の伝統があり、ちなみに乳飼比では、三割台で推移しているところでは、基本路線は一丸となって貫くつもりですが、牛づくりでは、若干の柔軟性も必要です。

ご承知のとおり、いよいよ全国共進会岡山大会の開催が迫っており、我々も卒業生の皆さんと同様に選抜に残れるよう努力しています。しかし、共進会に出品してみると、他と比較して初期生育や腹のサイズの違いに圧倒され、自給のロールだけではかなわないと痛感しました。シヨウの上位を目指すためだけでなく、ルーメンの発達には良質な乾草が必要と講義しながら牧場で実践できていなかったため、五カ月令頃までは、

良質乾草を給与するよう改善しました。このように頭の切り替えができたのも共進会のお陰でしょう。また、校外にもしっかりとアンテナを向けて、酪農家の皆さんと情報交換ができる場のひとつが共進会だと思えます。リングの外から傍観するより出品牛の世話をしながら色々な話ができ、参加することに意義があるので、何とか選抜に残れたらと思っています。

さて、最後に自動哺乳システムを導入して一年が経



過し、子牛の下痢で悩まされてきた第2牧場も改善成果が出始めています。大きく変わった点は、ミルクの哺乳形態がバケツによるガブ飲みから本来どおり乳首になったこと（食道溝反射が充分起こる）。また、哺乳回数が二回から五回へ分割可能となったこと。スターターの摂取と哺乳量が連動し、離乳がスムーズに無理なく行える等です。別表に第三四期生の橋本君が卒論で整理してくれた新旧の比較の一部を紹介いたします。このシステムを経て良質乾草ももらった子牛達が搾乳牛になってどれだけ頑張ってくれるか楽しみです。

卒業生の皆さま、建物施設が様変わりしても、目指す草地酪農の展開は変わっておりませんので、近くにおいでの際はお立ち寄りのうえお声をかけて下さい。